

【4-8 定性的システマティックレビュー】

CQ	CQ7-7	乳製品の摂取は乳癌患者の予後に影響を及ぼすか？
P	特に年齢や病期に限定のない乳癌患者集団のほか、閉経状況・高脂肪乳製品・低脂肪乳製品に限定した研究があった。	
I	診断前ならびに診断後の乳製品摂取量を評価。多くは食物摂取頻度表 (FFQ) を用いて評価している。	
C	一日摂取回数を段階的に区分し解析した研究が多く、最小摂取群を基準として解析されている。乳製品の定義は様々でバター、マーガリン、ラードに限定したものから、ヨーグルト、ミルク、チーズなどを含めたものまで存在した。	
臨床的文脈		乳癌患者において、積極的に生命予後を改善させる日常生活の要因があるかどうかを明らかにすることは極めて関心が高い事項である。乳製品は日常生活にあふれている食品であり、また、個々においてなくてはならない依存度の高い食品でもあることから、その益と害において明らかにすることの意義は大きい。

O1	乳癌再発について扱った研究は5件あり、内訳は診断前2件、診断後2件、診断前後1件であった。診断前で1件再発リスクが上昇し、特に閉経前女性で高かった。高脂肪診断後の2件において、ただ、診断前後の高脂肪乳製品の検討では、有意な再発リスク増加を認められた。	
非直接性のまとめ		
バイアスリスクのまとめ	有意な関連のあった研究はバター、ラード、マーガリンを乳製品と定義づけしており、ミルクやヨーグルトなどの摂取は反映しておらず、乳製品としてリスクを正しく反映しているかは疑問である。	
非一貫性その他のまとめ	報告が未だ少なく、一貫性を議論するほどのエビデンスはないように思える。	
コメント	乳製品も食品の種類や成分など様々であり、洗練された研究が望まれる。	

O2	乳癌死亡について扱った研究5件であり、内訳は診断前1件、診断後3件、診断前後1件である。総乳製品摂取では有意な乳癌死亡リスクを認めなかったが、高脂肪乳製品では高頻度摂取群では有意にリスクを高めた。	
非直接性のまとめ	日本人を対象とした研究は認めていない。	
バイアスリスクのまとめ	有意差を認めた1件の報告は、様々な乳製品の摂取を考慮された研究であり、その点ではバイアスリスクは少ないが、他の報告が未だ少ない。	
非一貫性その他のまとめ	報告が少なく、一貫性を議論するほどのエビデンスはないと思われる。	
コメント	乳製品と乳癌死亡リスクについての研究が少なく、今後研究の増加が期待される。	

O3	全死亡について扱った研究6件のうち、診断前1件、診断後4件、診断前後1件であった。診断後の1件で全死亡リスクの増加を認めた。特に高脂肪乳製品の過剰摂取によるリスクの増加を認めており、低脂肪乳製品では有意なリスクを認めなかった。閉経前乳癌患者の検討でも有意なリスクを認めなかった。	
非直接性のまとめ	日本人を対象とした研究は認めていない。	
バイアスリスクのまとめ	閉経状況、診断時期別による検討でも有意差は認めておらず、5件の研究に関して他の因子との調整もされており、バイアスリスクは少ないと思われる。	
非一貫性その他のまとめ	診断前後にかかわらず一致した結果が得られた。	
コメント	高脂肪乳製品摂取によるリスクに関しては注視すべきである	

04	<p>一般健康への影響を扱った研究は、乳癌以外の死亡を評価したコホート研究1件であった。総乳製品摂取に関しては有意なリスクは認めなかったが、高脂肪乳製品では乳癌以外の死亡リスク増加を認めていた。</p> <p>一般成人における乳製品に関するレビューが1件ヒットした。乳製品の摂取は脳卒中のリスクを減少させるメタアナリシスが存在し、日本人を対象とした研究が4件存在する。また、成人の骨健康の維持改善効果もあると考えられている。</p>
非直接性のまとめ	<p>乳癌以外の死亡に関しては、日本人を対象とした研究は認めていない。</p> <p>脳卒中と乳製品の一般成人におけるリスク減少効果は日本人を対象とした研究は4件存在し、有意にリスク低減した。</p>
バイアスリスクのまとめ	<p>乳癌以外の死亡に関しては、研究が1件のみであるため、バイアスリスクの存在が懸念される。脳卒中に関しては一般成人に対してであるが多く検討されており、バイアスリスクは少ないと考える。</p>
非一貫性その他のまとめ	<p>乳癌以外の死亡に関しては報告が少なく一貫性を議論するほどのエビデンスはない。</p> <p>脳卒中に関しては日本を含むアジアにおいてもリスク低減しているので一貫性があると思われる。</p>
コメント	<p>乳癌以外の死亡に関して、1例の報告のみであるが高脂肪乳製品の過剰摂取はリスクとなるかもしれない。乳癌患者における一般成人に対して同様、おそらくは脳卒中には有利に働くことが考えられる。乳癌患者に対するこれらの研究は非常に少ないため、今後の研究が待たれる。</p>

【4-10 SR レポートのまとめ】

1. 乳癌再発

乳癌再発について扱った研究は5件あり、内訳は診断前2件、診断後2件、診断前後1件であった。診断前で1件再発リスクが上昇し、特に閉経前女性で高かった。

メタアナリシスでは、診断前および診断後で関連を評価した。

診断前:HR = 1.07(0.91-1.25, P=0.41) 効果に異質性やや認め、診断後:HR0.96(0.85-1.08, P0.49) 効果に異質性はなく、リスクは認めなかった。

また、高脂肪乳製品について検討した。HR1.14(1.02-1.29, P=0.02)と効果に異質性はなく、有意なリスク増加を認めた。

全体として文献が少なく、全体としてエビデンスレベルは弱とした。

2. 乳癌死亡

乳癌死亡について扱った研究5件であり、内訳は診断前1件、診断後3件、診断前後1件である。総乳製品摂取では有意な乳癌死亡リスクを認めなかったが、高脂肪乳製品では高頻度摂取群では有意にリスクを高めた。

メタアナリシスでは、診断前、診断後、高脂肪乳製品で関連を評価した。

診断前:HR =0.96(0.89-1.04, P=0.32) 効果に異質性を認めず、診断後:HR1.01(0.80-1.28, P=0.71) 効果に異質性はなく、リスクは認めなかった。

高脂肪乳製品は、HR1.26(1.06-1.49, P=0.02)と効果に異質性はなく、有意なリスク増加を認めた。

全体として文献が少なく、全体としてエビデンスレベルは弱とした。

3. 全死亡

全死亡について扱った研究6件のうち、診断前1件、診断後4件、診断前後1件であった。診断後の1件で全死亡リスクの増加を認めた。特に高脂肪乳製品の過剰摂取によるリスクの増加を認めており、低脂肪乳製品で有意なリスクを認めなかった。

メタアナリシスでは、診断前、診断後、高脂肪乳製品で関連を評価した。

診断前:HR =1.01(0.95-1.08, P=0.75) 効果に異質性を認めず、診断後:HR1.03(0.89-1.19, P=0.74) 効果に異質性は認めしたが、いずれもリスクは認めなかった。

高脂肪乳製品は、HR1.24(1.00-1.54, P=0.05) 効果に異質性が高く、有意なリスク増加を認めた。

全体として文献が非常に少なく、全体としてエビデンスレベルは弱とした。

4. 一般健康への益

一般健康への影響を扱った研究は、乳癌以外の死亡を評価したコホート研究1件であった。総乳製品摂取に関しては有意なリスクは認めなかったが、高脂肪乳製品では乳癌以外の死亡リスク増加を認めていた。一般成人における乳製品に関するレビューが1件ヒットした。乳製品の摂取は脳卒中のリス

クを減少させるメタアナリシスが存在した。この研究では日本人を対象とした研究が4件含まれている。

適切な乳製品の摂取は、乳癌以外の死亡リスクは増加させず、脳卒中のリスクを低減させ、全体としてエビデンスレベルを弱とした。